
そこには死体があった

ランデブー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そこには死体があった

【Nコード】

N1388C

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

明朝、濡れた道路に成人男性が倒れていた。

雨上がりの明朝、そこには死体があった。

仰向けに倒れているそれは見たところ成人男性。頭がパツクリと割れていて生臭く真つ赤な血が流れ出ており、水溜まりを朱に染めている。

周囲には朝ご飯を探しゴミ袋を漁っている猫しかおらず、死体がぼつんと倒れている不気味な光景に背筋が寒くなる。その要因は、まだ朝方で空気が冷たいからなのか。

「どうしよう？　こんなの見ちゃったしな……」

その時紺色のジャージを着ている少年が息を切らしソレを見ながら立ち止まり、腕組みをして静かに呟いた。それにしても少年は運が悪い、死体が寝転がっている現場に出くわしてしまったのだから猫はゴミ袋から見付けた魚の皮を美味しそうに食べている。

「俺は持久力を付けるために走ってるだけであって、それ以外の事は何も望んでいない。ましてやこんな事件に巻き込まれそうな悪臭が漂うモノに一切関わりたくない！　時間の無駄になるし、何よりこの人と俺は無関係で何故死んでるのか等気にもならないし」

厄介事には首を突っ込みたくないのが普通であるから、少年の考えは正しい。しかしこのような物を見たのだから、警察に電話をかけた方がよい。

「こんな時に限って携帯忘れるなんてついてない。仕方ないから今時珍しい電話ボックスでも探すか」

辺りをキョロキョロと見回し肩を落とす。携帯電話が普及している現代、電話ボックスを見付ける方が大変。いつの間に無くなったのか知りたい所だ。

「……ああ……ああ……」

耳を澄まさないと言き取りにくい声は、電線に停まっている真つ

黒な鳥のカアカアという楽しそうな鳴き声で掻き消された。

「な、何だよこの鴉達は。どこからこんなに湧いてくるんだ？」

空は真っ黒に染まり驚怖が少年を襲う。奴等は電線や屋根に停まり獲物の様子を見下ろす。少年の頭皮からは汗が流れ、筋肉質な足は竦み、目やにが付いた目を大きく見開く。

「あああ！　あああ！」

何の前触れもなく藻掻き苦しむ死んでいるはずの成人男性。声を限りに這い付くばって少年の方へゆっくり進む。涎を垂らし、血も垂らし、けらけらと笑っているその姿は奇天烈。

「こつちに来るな！　お前死んでたんじゃないのかよ？　何で動いてるんだ！」

腰を抜かし少年は両足をばたつかせ、無意味な行動をして必死の抵抗をしている。真っ黒な連中は、一斉に鳴き始める。

「アハハ……僕は死んださ、自殺したんだ。でも一人じゃ淋しいから生き返ったんだ、一緒に逝ってくれるお友達を探す為にね」

「俺は死にたくない、まだ死にたくない！」

しかし右足を力強く握られているので身動きがとれず、涙。そして、

「漏らしたのか？　アハハハハ——」

少年の股からは水っぱいモノが流れている。成人男性は血痕が付いた手で頭を擦るが、少年は歯を力チ力チ鳴らし怯えていて、体を震わせ目は虚ろ。

「恐がらないでよ、傷付くでしょ、泣かないで」

大きく口を広げて笑った。不気味だ。歯は腐っていて、息を吐く度にとつもない口臭が漂う。例えるなら生ゴミのような、下呂のような、汚物のような。ただ一つハッキリと言えるのは、気分を害する臭いという事だ。

「くさい……くさいよ」

少年は咳き込みながら擦れた声で言った。鼻を摘み、口元に手を当てる。

「なんだと、お前なんて言ったんだ？　くさいだと？　アアア　×

■ ♀

意味不明な叫び声を張り上げ右手を上げた。すると剥ぎ取れている爪とか細い腕は、獣のような鋭い爪と極太の腕に変形した。爪は真つ赤に染みているが、コレは今までの犠牲者の血であろうかと思うと寒気が走る。

「僕は汚物のように臭くないぞ、毎日一時間もかけて頭の天辺から足の爪先まで念入りに丁寧にゴシゴシしているぞ。そして出掛ける前は必ず愛用の香水を付け、良い匂いにして会社に出勤するんだ！　だから僕は臭くない、わかったか小便小僧。お前の方が僕より何百倍も臭い、アンモニアの臭いがするからな」

満足気に笑うが、もうそこに少年はいなかった。成人男性がいたらだと長話しをしている隙に、足音たてず息殺し慎重に逃げたのだろう。

「アイツ逃げたのか？　でも俺と出会った奴は不幸になるから、その内勝手に死んじゃうな。ハハハ、愉快だ」

まだ空腹なのか、猫はゴミ袋を漁り続けていた。成人男性は腹ペコの奴等を見やり、指をパチンと鳴らし合図を送った。

「今度は野郎じゃなくて、セクシーなお姉様が良いな。その時は死ぬまで愛してやるよ」

彼方から断末魔の叫びと無数の羽音。

外が騒がしいのでこんな時間に迷惑だと思ったのか、窓を開け顔を出す女性はウルサイと怒鳴った。それから、今何時だと思ってるんだよ、昨日夜勤だったから眠たいんだよ、と付け足し勢い良く窓を閉め再びここは静寂に戻る。向こうの方からサイレンの音が聞こえた時、奴等は仲良く空へ飛び上がった。ゴミ捨て場に残されたのは、全身食い千切られた無惨な猫の姿だった。

成人男性は、もうソコにはいない。愛し合う相手を探しに行ったのだろうか？

いつもはお昼からお仕事のコンビニ店員は、外に止まっている救急車やパトカーを見て呟いた。

「今月は無事故だったのにな」

現場では、トラックが何台もの乗用車を機能停止にし横転していた。救急車へ運ばれるのは乗用車の運転手だろうか？　トラックの運転手だろうか？

「あゝ、店員さん。アレは人身事故ですか」

「そうですよ。さっき見ましたが、顔が潰れていました」

「エグいな。お姉さん、今日夢に出るかもよ？」

スーツ着用のオジサンは、新聞と煙草のお金をコンビニ店員の掌に置く。

「そんな事言わないで下さいよ。私怖がりなんですから」

レジスターからお釣りとレシートを取り、常連のオジサンに渡す。

「顔が潰れたのはどんな人？　女子高生だったら悲しいな」

「少年ですよ。突然飛び出してきたらしいです」

「その少年はまだそこにいるの？」

「警察が写真撮ってます。気分悪くならないのかな」

血が飛び散っている道路、そこには死体があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1388c/>

そこには死体があった

2010年10月8日15時11分発行